

平城宮跡第102次発掘調査現地説明会資料

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

昭和52年6月11日

平城宮跡第102次発掘調査は、推定第一次朝堂院地区の東北部にあたり、昨年春に調査した第97次調査の南に接する地域である。調査地区内には建物の基壇跡と考えられる土壇が南北に二つ存在している。第97次調査では、同様の土壇が、建物基壇跡であり、基壇積土と、基壇の東西を画する溝状の布掘事業が南に延びており、建物がさらに南に続く事が判明している。また推定第一次朝堂院地区の東を画する掘立柱塀、築地の存在より、この地区の変遷が明らかになった。本調査は昭和52年4月に開始した。発掘面積は約3700㎡である。

◎調査地区の地形および遺構の概要

宮造営以前の本調査地区は、北の推定第一次内裏地域から延びる小支丘の東南部にあたり、南および東に下るなだらかな斜面部である。旧地表面はこの谷筋に沖積した黒色粘土である。この黒色粘土の旧地表は元の地形に準じ、西・北が高く、東・南が低い。この地域を整地によって平坦に造成し、遺構を構築している。現在までに検出した遺構は、すべて、この整地後に造営されたものである。

基壇建物跡

発掘区の南・北にある土壇を中心として、2棟の建物の存在する事が判明した。北側の建物は第97次調査で発見した建物の続きである。2棟の建物に分けられる理由は、基壇積土のなくなる事、足場穴の柱筋の違いによる。この2棟の建物は推定第一次朝堂院地区の東第1堂、東第2堂にあたる。

東第1堂 (SB8400)

SB8400は、第97次調査で検出し、さらに南に延びている建物で、東第1堂にあたる。基壇積土は東西幅約19mで、今回の調査区の北端より約30mの部分で基壇積土がなくなり、SB8400の南限となる。基壇規模は南北長約54m、東西長約19mとなる。土壇の周辺で根石を6個検出したが、根石の間隔によって、SB8400は桁行15尺、梁行12尺の11間×4間の切妻の南北棟と想定される。基壇積土は約65cmの高さで残存している。

基壇積土の面および基壇掘込面の整地層から柱筋を揃えた、東西7列、南北15列の径30cm程の小穴を検出した。これら小穴群は根石位置をはずして掘られており、基壇上に想定される建物の柱間と密接に関係するため、建物建築の際の足場穴と考えられる。東・西縁の足場穴では根石を据えている。さらに東縁の足場穴に近接して、1層上の整地層より掘り込まれた、根石のない足場穴を検出した。西縁でも重複関係にある足場穴が存在し、これらは構築後の部分的改修の際の足場穴と考えられる。

東第2堂 (SB01)

南の土壇を中心として検出した建物で、SB8400に南接して存在する東第2堂である。基壇積土は南北に約20m検出したが、さらに発掘区の南に延びている。東西幅は北のSB8400と同一で約19mである。基壇積土は約45cmの高さで残っている。SB01は、土壇周辺で3個の根石を南北に連らなって検出し、桁行15尺の南北棟が想定される。梁行は足場穴との位置関係より、SB8400と同一の柱間寸法が考えられる。また、SB8400と同様、基壇積土面および基壇掘込面の整地層から東西10列、南北9列の柱筋を揃えた足場穴を検出した。これらは建物の柱間に必ず2列間隔になるように配置され、棟柱筋では北側に1個検出しただけである。東・西縁の足場穴の南北筋はSB8400の東・西縁の足場穴と揃わない。また根石を有するものは

なく、重複関係にあるものも存在していない。

なお、第97次調査では掘込地業が行なわれている事が確認され、今回の調査においても、基壇積土のない部分で同様の地業を検出した。この地業は東第1堂・東第2堂を一貫して行ない、さらに南に続いている。

基壇の東縁から推定第一次朝堂院地区の東を画する掘立柱塀までの間に、瓦を多量に含む整地層を検出した。この整地層は第97次調査で瓦積遺構SX8390としたものであるが、砂層中に瓦が含まれている状況であり、瓦を敷きつめた遺構とは言い難い。層的には、基壇掘込面より上層であるが、含まれていた土器より、平安初頭の整地層と考えられる。この整地層中に、切石の凝灰岩が敷き並べられている。(SX02)これらの切石凝灰岩の性格ははっきりしないが、東第2堂SB01に関係あるかも知れない。

南北溝 (SD03)、小穴列 (SA04, SA05)

基壇掘込面にあたる整地層からは、調査区を貫通する南北溝と、両側に1列ずつの小穴群を検出した。この南北溝、小穴列は今回初めて検出したものである。南北溝は、築地から基壇東縁までの区画の排水路と考えられる。両側の小穴列の性格ははっきりしない。

掘立柱塀・築地 (SA5550A・B・C)

発掘区の東寄りの部分で、推定第一次朝堂院地区の東を画する南北の掘立柱塀および築地を検出した。掘立柱塀は柱間3m(10尺)で20間分あり、第41次・第97次調査と合わせて46間分(138m)を確認したことになる。この掘立柱塀は推定第一次朝堂院の想定中軸線より東へ約107.5m離れる。これを中軸で折り返して推定第一次朝堂院の東西幅を求めると215mとなる。

掘立柱塀と築地の関係は切り合いより、掘立柱塀→築地→掘立柱塀の3回の改修が確認できた。築地は西縁を確認する事ができたが、築地の東縁は後世の排水路によって削平されており確認できなかった。大溝 (SD3715)、掘立柱塀 (SA8410)

発掘区東側で推定第一次朝堂院と推定第二次朝堂院の間を流れる大溝を検出した。平城宮の中心部を南北に貫通する幹線水路で、溝幅平均3mである。掘立柱塀・築地の東18mに位置する。この大溝は奈良時代全般を通じて存続している。さらにこの大溝の西3mの所に南北に貫通する掘立柱塀 (SA8410) が存在し、掘り込み面は大溝検出面より下の整地層であり、柱間は約3mである。

◎遺物

土器の出土量は極めて少ない。これは発掘区全体の性格を示すものであろう。瓦を含む整地層中より土師器高杯破片、灰釉が出土しており、平安時代初頭に属する。

瓦類は多量に出土している。瓦を含む整地層からは、第I期から第III期までの瓦が出土している。量的には第I期・第II期の瓦が多数を占めている。築地の東側から大溝までの地域では第II期の瓦が多数を占めており、築地西側とは若干異なる傾向を示している。南北溝東側の小穴では第I期の軒丸瓦が、築地築成以前の掘立柱塀の埋土からは藤原宮式再使用瓦が2点出土している。



